accidental overlapping　～偶然の重なり～

あーずにゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ａｃｃｉｄｅｎｔａｌ　ｏｖｅｒｌａｐｐｉｎｇ　～偶然の重なり～

【Ｎコード】
Ｎ０８０４Ｙ

【作者名】
あーずにゃん

【あらすじ】
俺は、偶然、というか殆ど奇跡で超難関高校に入学し、偶然校門前で出会った奴を助け、そいつが偶然同じクラスで隣の席。
あげくの果てには、携帯の機種まで同じだった。
そんな偶然が重なり、いろいろな人や物、運命までも巻き込みながら、偶然にも今、俺と藤和は、同じ場所に立って生きている。

完全オリジナルです！
見ていただけるとうれしいです。
オリジナルを書くのは始めてなので、感想、アドバイスなどお願いしますｍ（　）ｍ

第一話　『奇跡と出会い』

入試で奇跡が起こると思うか？
普通は絶対に起きない、ってか、起きたらヤバいを通り越して笑えるよな。
でも、起こってしまったのだ。

三年前、東京、愛知、大阪の三県で、試験的に導入した入試の方法があった。
『マークシート受験法』ってヤツだ。
それを採用した理由は、出来るだけ多くの問題を短時間で出し、それをどれだけできるかっていう内容だ。
なぜそんなことになったかというと、同じく三年前に創立された、『国際選抜職業実践型高等学校』通称国選高、だ。
その学校は、全世界の中でも初めての試みで、実に先進的なものであった。
普通の高校は、仕事に就くために勉強する。
が、この学校は実際に仕事を実践し、その職についてのプロより上の存在になること（野球で言えば、メジャーリーガーだ）これを目指している。
三年前、できた当初は『国際職業実践型高等学校』という名称で、倍率は４０倍をオーバーした。
そのせいで、採点の時間がかかり、他の高校への受験者の激減が起こった。
そのために打ち出したことが、『受験者を点数の高い順からドラフトすること』だった。
ちなみに定員は８０名だ。

話を戻そう、それで、俺に奇跡が起きたってのは、この超エリート高校に選ばれたことだ。
ちなみに、俺はある一教科以外は全て平均点から－２０だ。
そんな俺が受かった訳は、マークシート受験法なるヤツのせい。
４択の問題を、わからずに適当に書いたら、正答率が９５％を超えた。
俺の勘も捨てたもんじゃないらしい。
まあ、いいことなんだろうが、俺は少し迷惑している。
ニュースが始まれば、堂々と合格した８０名の名前が出る。（人権侵害とかいうやつにあたらないのか？）
学校へ行けば、校門にでっかい横断幕がある。
クラスに入れば、女子からの質問攻め＋男子の冷たい目。
なんかどこぞのスター様の気分だ。
決してちやほやされるのが嫌なわけではない。
目立つのが嫌なんだ。
俺は普通の人生を普通に生きて行きたかったのに…。
かと言って、この卒業したらエリート確定の高校に受かり、それを破棄することは世間的に無理だ。
だから、俺はこの高校に進学した。

申し遅れた、俺の名前は立川昴
たちかわすばる
。
国語の成績以外全て悪く、顔は中の上、スポーツもまあまあできる。
身長も１７８ｃｍとまあまあ高い。
まあ、こんなところだ。

特に特徴などない、ちょっと背の高い普通の一男子高校生と思ってくれればいい。
ただ、特徴があるとすれば…女子が苦手ってことかな。
ていうか、元々人と話すのが苦手だ。
だから、目立たないで、いつかは気の合う人とであって、子供作って、ひっそりと暮らしていきたかった。
…だが、それも無理そうだ。
今、俺の目の前には、無数の記者たちがかシマウマに群がるハイエナよろしく、１５０ｃｍの小柄なポニーテール娘に群がる。
マイクやＩＣレコーダーを様々な場所から押し付けられて、苦しそうにしているそいつを、なにを思ったのか俺は、人間が苦手な上に、そいつが女子だってのに、助けようとしたのだ。
「よう、お前もこの学校だったのか、行こうぜ。」
記者の間を割って入り、ポニテ娘の手を引いた。
最初はわけが分からないような顔をしていたが、俺の意図を理解したらしく、話を合わせ、記者の群れから抜け出した。
「別に…助けてくれなくても良かったのに。」
「迷惑だったか？」
「そういうわけじゃないけど…。」
こいつ、体は小さいくせに、余計な意地をはるらしい。
「なら、いいだろ。」
やっぱ人と話すってのは疲れるな。
特に異性なら二倍疲れる。
ポニテ娘が、何か思いついたように顔を上げた。
「あんたって、どっかの社長の子供だったりするの？」
「そんなわけない。どこにでもある家庭の長男だよ。」
「ってことは、あんたって立川・・・昴？」
「な、なんで知ってるんだ？」
この学校に入学するってことと、さっき社長の子供とか聞いてきたから、国家機密のデータベースにでも入り込むことができる家柄な

のか？
「なんでって、ツイッターとかフェイスブックよ。あんたとあたし結構騒がれてるわよ。」
「な、なぜだ？」
「一般家庭から受かったからよ。この学校の生徒なんか、授業料のたっかい塾とか、家庭教師とかに毎週４０時間くらい勉強教えられてる、金のある社長とかそこら辺の子供ばっかよ。」
「そうなんか・・・。ってことは、あんたも一般家庭なのか？」
「そうよ。父親が中小企業の課長やってる、ありきたりな家よ。ていうか、あんたってよばれるとムカつくわね。」
お前も俺のことあんたって呼んだじゃねえか。
「じゃあ、なんて呼べばいいんだ？」
「藤和亜美
とうわあみ
。」
「藤和な。分かった。」
「それでいいわ。早くいかないと遅刻するわよ。」
携帯のディスプレイを俺に見せる。
「そうだな。」
そういって横を向いたときには、藤和はもういない。
「早くこないとおいてくわよー！」
ったく、入学早々変な奴に会っちまったもんだ。

どうせめがねをかけたやつばっかなんだろ、と思ったが、そういう奴は5割くらいで、机に突っ伏してる奴が2割、鏡をみてせっせと髪をなおしてる奴が2割、残りの1割は普通に話しているだけだった。
（俺の席はどこかな～、っと。）

俺の席はなんと窓際の一番後ろ、なにをするにしても最高のポジションだ。
ほんわかした気持ちでスクールバックを机におく。
「あら、あんた隣なの？」
「え、あぁ。そうみたいだ。」
「ふーん。隣で変なことしないでよ。」
さっき会ったばっかなのに俺のなにが分かる。
「あ、そういえば、メアドと番号教えてよ。あたしこういう奴ら苦手なんだ。」
前のめがねをかけた真面目ちゃんたちをみて、うぇー、と舌を出してみせる。
「分かった。はい。」
僕は携帯を出して、藤和の方へ向ける。
「なに、くれるの？」
「赤外線だよ！」
ああ、そう。と言って、藤和も携帯を差し出す。
「「あ。」」
二人の声がそろう。
同じ機種だったのだ。
偶然にも。
「ま、まぁ、これ結構人気モデルだし、かぶることもあるわよね。」
「あ、あぁ。それより早くしないと先生くるぞ。」
ピロリーン♪と赤外線を終えた合図が聞こえた。
顔を上げると、長いまつげに少々切れ目の気の強そうな目。
整った鼻に桜の花びらのように鮮やかなうすいピンクの唇。
さっきは気づかなかったが、こいつは相当美少女だ。
「・・・なにみてんのよ。」
「い、いや、何でもない。」
声をかけられハッと我に返る。
「そんなぼーっとしてると、教師に目つけられて宿題増えるわよ。」

「あ、あぁ。」
きつい言葉をかけながらも。少し心配してくれるのはこいつの優しさだろうか。
少しすると、教師が入ってきた。
どこにでもいそうな奴だったが、言うことがなんか難しい。
国語力があってよかったぜ・・・。

「ちょっといいですか？」
「え、あ、はぁ。」
「私、吾妻誠一
あがつませいいち
と申します。」
「吾妻くんね。よろしく。」
吾妻って、たしか日本で普及率ＮＯ．１のウイルス対策ソフトの会社の代表取締役の名字じゃなかったか？
「それで、あなたは立川昴さんですよね？」
「あぁ、そうだよ。ていうか、敬語じゃなくていいよ。堅苦しいし。」
「はぁ、そうですか。」
「うん。それで俺になんか用かな？」
「あ、すっかり忘れてた。こっちから話しかけたのにごめんね。」
この学校は天然が多いのだろうか？
藤和も天然ぽかったし。
「それで、あの、よかったら、僕と友達になってほしいんだけど・・・。」
「あ、いいよ。とりあえずメアド交換しようか。」
俺がそういうと、吾妻はほっとしたような顔をした。
「吾妻って聞いただけで分かったでしょ？」

「あぁ、あのウイルス対策ソフトの。」
「うん。この学校に来る前は、なるべく普通の生活がしたくて、公立高校に通ってたんだ。でも、お父さんが有名だから、みんなに一目おかれて、まわりに誰もいなかったから．．．。」
「そうなんだ。大変だったね．．．。」
どうやら、金持ちも金持ちで大変らしい。
「あ、それじゃ、また後で！」
「あ、おう。」
あいつとは話してても疲れなかったな。
気が合う奴なのかもしれない。
そして、一限の授業が始まったとき、俺はそのカリキュラムに絶句した。

第一話　『奇跡と出会い』（後書き）

感想いただけるとうれしいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0804y/

accidental overlapping　～偶然の重なり～

2011年10月31日01時24分発行